
さよならのなみだ

久芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さよならのなみだ

【Zマーク】

Z1317L

【作者名】

久芳

【あらすじ】

涙がこぼれそうになるのを、私はずっと、我慢していた。高校生活最後の、卒業式といつこの日に。私の恋は終わりをむかえるのだった。

涙が、こぼれそうだった。

「 広崎舞美」

名前を呼ばれて、私は「はい」と返事をして立ちあがる。その声は自分でも驚くほどからかにかすれていて、けれどその頼りない声に笑う人は誰もいなかつた。

昨日の予行演習を思い浮かべながら、私は背筋を正して、ゆっくりとした足どりで壇上へとのぼる。階段で足元を確認しようとうつむくと、熱くなつた目頭の潤みが増して視界が歪んだ。

「卒業、おめでとう」

柔軟な笑みを浮かべる校長先生から卒業証書を受け取つて、深く一礼をする。これが私の、高校生活最後のイベント。むかえてみると案外、あつけないものだつた。

自分の席に戻る途中、次の生徒の名前を呼ぶ担任の声が聞こえる。私たちがはじめて担任を受け持つたクラスだつただけあつて、感動もひとしおなのかもしれない。彼の声は涙まじりにふるえていた。

その声につられたのか、鼻をすする音があちこちから聞こえてくる。隣の席の子は肩を小刻みに揺らしながらハンカチで目をおさえていた。男子の列からは嗚咽まで聞こえてくる。こんなに泣いているのは私たちのクラスぐらいだつた。

鼻の奥がつんとして、私はもらい泣きしそうになるのを懸命にこらえる。涙を吸つたまづげが重くて、閉じたまぶたを再び開けることがなかなかできなかつた。

泣いちゃだめ。そう、自分に言い聞かせる。

まだ、涙を流してはいけない。

今日、この恋は終わるから。

そのときに、涙を流すと決めたんだから。

片想いの始まりは入学式だった。

学校のある日は毎日顔を合わせていた。

さらに部活も一緒にだった。

彼に対する想いは日に日に増していくけれど、私は決して、その想いを伝えることはしなかった。

自分の中で気持ちが自然とおさまっていくのを待っていた。

けれど、どんなにあきらめようと思ってもあきらめることができなかつた。

だから私は、この最後の日、「三年間の片想いにピリオドを打つことにしたのだった。

「舞美、式の最中泣いた？」

「私は泣かなかつたよ」

滯りなく式が終わり、教室に戻つた私たちに待つていたのは、最後のHRだった。

頬杖をつきながらぼんやりと教壇を眺めていた私に、隣の席の野富修が話しかけてくる。彼とはなんのご縁なのか、入学初日に隣の席だったことをはじめとして、なにかと高校生活を一緒に過ごした仲だつた。

「おれ、なんか知らないけどテッローに名前呼ばれたりすつゝい泣きそうになつてた。我慢して卒業証書もらつたけど、戻るなりもう、むせび泣き」

あの嗚咽の主は彼だつたらしい。

「みんなけつこう泣いてたよね……」

教室をぐるりと見渡してみると、みんなまだ、目に赤みが残っている。マスカラの落ちを気にした女子たちは早々とメイクを直していたからわかりづらいけど、鼻の頭の赤さは塗つただけではすべて隠せない。数多い二学年の生徒の中でも、私たちのクラスは抜きん出て涙を流す人が多かつたようだ。

「テツローに泣かれたら、そりやおれらも泣くしかなくなるよな」とうの担任、小関哲郎は、最後のHRでみんなに良い話をしようとしているのに、ちゃちゃをいれられたりなんなりで結局うまく話すことができなくなつていて。まだ年も若く、私たちの兄貴分のような存在だったテツローは、誰とでも分け隔てなく接する姿がみんなからとても好かれていた。

「……ほら、また泣いてるし」

「ほんと、テツローって涙もろいよね」

入学したときにはまだ新婚ほやほやだったテツローだけど、今ではもう立派に一児の父親だ。けれど情に厚くて涙もろいところはいつまでも変わらなくて、教壇で涙をぬぐつ姿にはなぜか私たちと同じにおいがした。

「そういえばさ、修。部活の送別会の話ひやんと覚えてる?」

「テツローの話聞かなくていいのかよ」

話しかけてきたのは修のほうからだとこゝのに。私はもうじに泣きしそうになつて、彼の顔を見て思わず笑ってしまった。

修もテツローと同じで、実はけつこう泣き虫だったりする。弱いときにめそめそ泣く泣き虫ではなく、感情が昂ぶったときや感極まったときに、惜しげもなく涙を流す男泣きの泣き虫だった。

「最後に部長から部員に挨拶お願ひしますって、言われてたでしょ？」修、ちゃんと覚えてる？

「……忘れてた」

修とは同じ写真部に入つていて、彼が部長になつてからはなにかと私が補佐のようなことをしていた。副部長は他のクラスにいるのだけど、やっぱり同じクラスに部員がいるとなにかと伝言を頼まれたりしたので、送別会の件も私はすこし詳しく耳にしていたのだ。

「最後ぐらいいちやんとやうよ

「おれも超てきとーな部長だつたからなあ

「めんどくさいなと呟きつつも、きっと彼は挨拶の内容をちゃんと考えてくるに違いない。表面上はやる気がないような軽い態度ばかりどるから誤解されやすいけど、修はやるじきせむやんとやる。だから私も顧問も彼のことを信頼していた。

高校生活の中で、一番一緒にいたのは修だった。いろんな話をし、一緒に笑つたり怒つたりした。テスト前の一夜漬けを共にして、その後の点数の見せ合いで半狂乱した仲でもあった。学校祭では感動のあまり、一緒に泣いたこともあった。

彼とは同じ大学に進学が決まっている。卒業してもきっと、一緒にいることが多いのだろうなという、漠然とした予感があった。

「……舞美

「なあに？」

ようやく涙が落ち着いたらじてテツローが、贈る言葉の続きを話はじめる。その深みのある声に溶けこませぬよう、修は横田で私を見ながら小声で呟いた。

「やつぱり今日、言つのか？」

「…………」

その声に、私は黙つてうなずくことしかできなかつた。

下手に声を出すと、また、我慢していた涙がこぼれてしまいそうだつたからだ。

HRの最後をテツローの胴上げで飾ると、みんなは続々と、帰りの仕度を始めた。

後輩からもつた花束を両手いっぱいに抱える子もいれば、皆勤賞の盾を誇らしげに鞄につめる子もいる。そのまま玄関に降りてまっすぐ帰る子もいるけれど、大半はお世話になつた教師や後輩たちとの記念写真を撮りに行つてゐるようだつた。

私や修の元にも、部活の後輩がたくさん写真をねだりに來た。修は女子から人氣があつたはずなのだけど、意外にもブレザーのネクタイを欲しいという子は誰もいなかつた。

隣に私がいたから、みんな遠慮して言いづらかつたのだと思う。けれど私も修からネクタイをもらうつもりはなかつた。

一年生の終わりころからすこしの間、私は修と付き合つていた。今はもう別れたけれど、関係がぎくしゃくしていることはなく、友達以上恋人未満の仲はまだ続いている。だから知らない人はまだ私たちが付き合つてゐると思つてゐるし、受験のために一時的に別れて、またもとの仲に戻るのだろうと勝手に憶測している人もいる。まことひそやかに囁かれている噂に対し、私たちは特に何も言ふことはなかつた。

「舞美、職員室行つて写真撮つてこないのか？」

荷物はまとめたけれど教室から出ようとしない私に、同じく荷物だけはしつかり鞄にしまいこんだ修が訊いてくる。時間がたつにつれ人が少なくなつていく教室で、私たちは窓から校庭を見下ろして

時間をつぶしていた。

「だつてまだ混んでるだろ?」

「そつか

「修はいいの?」

「おれは別に。じつせ送別会とかで会つし

「そつ……」

返事もおやなつこ、心こころあらゆで校庭を眺める私に、修は肩をすくめてあたつを見回した。

「舞美

「ん?」

呼ばれて顔をあげると、背中にたらした私の髪に、修の手が触れる。気づけば教室にはもつ、私と修しか残っていなかつた。

「なんで泣かないの?」

髪から伝つた指先が、ようやく潤みの落ち着いた目じりを撫でる。修は背が高いから、私は必然的に見上げるかたちになつてしまつ。彼の指先は慣れたように私の頬をすべると、あいのラインを撫で、くこと顔を上向かせた。

私が目を開じると、まもなくして修の唇が重なつた。

軽くつこばむように、彼は何度も唇を寄せてくる。時折長く重ねて、離れて、また重ねて。唇を割つてとろりとした舌が歯茎を撫でても、私はただ黙つてそれを受け入れていた。

「……なんで、泣かないの」

唇を離して、修が問うた。何も言えぬままうつむきやうになる私の頬を両手で包んで、彼はしっかりと顔を覗きこんでくる。

「いつも、泣きそうな顔したのに。なんで今日は泣かないわけ？」

修と付き合つている間。したことはキスまでではない。

行き着くところまでいった。だからこそ泣きっと、今のよひにお互

いをよく理解した関係になつたのだと思つ。

修のことは嫌いじゃなかつた。たぶん好きなんだと思つ。だからこそ、キスをしても身体を触られても、嫌だと拒むことはなかつた。私はそれを利用していた。

修といえば、自然と気持ちが傾いていくと思つていた。修のことが『彼』以上に好きになつて、忘れることができると思つていた。けれど私の気持ちは正直で、どんなに身体を偽つてみても、心の底では彼のことが頭をちらついて離れなかつた。

修といて楽しいはずなのに。ふとした拍子に切なくなつて、泣きそうになつて我慢した。その涙が修への罪悪感なのか、それとも彼への恋しさなのかは自分でもよくわからなかつた。そんな中途半端な関係をするすると続けて、結局終わりを告げたのは私からだつた。修はすべてを知つて私と付き合つていた。

私が他の人に片想いしていることも、その気持ちを伝える意思がないことも、この不毛な恋心をなんとか自分で消してしまおうと思っていることも。そのため修を利用しようとしていることも。わかつていて、私に触れてきた。

私から付き合おうと言つて、私から別れようと言つたのに、その

自分勝手に文句ひとつ言わずに黙つてうなずいてくれた。

修のこと好きになれたらどんなによかつただろう。

「……修」

「ん？」

「ごめんね」

修はそれに、私の頭を撫でるだけだった。

彼の大きな手はいつも、私を落ち着かせてくれた。ひどく感情的になつて泣き出してしまったときも、唇を噛みしめてうつむいたときも、いつも穏やかに私に触れていてくれた。するよう指先にしがみついて、ふりほどくことなく私が離すまでずっとつないでいてくれた。

静まりかえった教室の向こうで、廊下では卒業生を探す後輩たちの足音が聞こえてくる。修は肩を抱くように私に腕をまわして、入学してからずっと伸び続けた髪を撫で続けていた。

修にこうしてもらつていると、私の中の『ちや』に絡まつた感情が、少しづつほどけていく気がした。

独占欲や、嫉妬心。片想いを続けていく中で、私を困らせたのはその醜い感情だった。彼が自分を見てくれることはないとわかつているのに、どうしても、他の人といふのを見ると胸がもやもやしてしかたなかつた。私のことを一番にしてもらいたくて、でもそんなわがままなことを思う自分が嫌で、おさえこもうとしても結局できなくて、そんな葛藤を長く長く、続けていた。

それも、今日で終わりにする。私は修に別れを告げたとき、自分の中でそう決めていた。卒業式の日を迎えて、どうしてもこの想いを捨てることができないのなら、潔く伝えてばつぱり断ち切つてもらおうと思つていた。

彼のことを思うと涙が出た。自分でどうしてかわからないくらい、胸の奥が熱くなるのだった。そしてそれを鎮めるかのように、涙があふれ出すのだった。

涙を流しても結局想いは鎮まらなくて、むしろ強まるばかりで。

自分の力ではもう、どうすることもできなかつた。
こんな人に好きになつたのははじめてだつた。

「……舞美、泣いていいんだぞ？」

目を閉じたまま唇を噛みしめる私に、修が心配そうに声をかけてくる。彼はいつも、そう言つては私を泣かせてくれた。私は何度、その広い胸に甘えたかわからない。彼も彼で、告白を渋る私を諭すことも突き放すこともせず、ただずるずると気持ちを引きずり続ける背中を、飽きもせぬさすり続けてくれていた。

「……泣かない」

どこまでも強情な私に、修はそつと息をつく。まぶたを伏せて何も見えなくとも、私はその息遣いで彼が笑つたのを知つた。
どうして笑つてくれるんだろう。私がもし修だったら、きっと呆れかえつて見捨ててしまうだろう。

「まだ、泣かない。でも、今日で、泣くの終わりにする」

声がふるえて、少しずつしか話せない。これで本当に、私は彼と話すことができるのだろうか。自分でも不安になってしまつぐらい、涙の袋を引き締める糸はもうく切れてしまいそうになつていた。

「……そっか」「

まぶたの向こう側で、修が動くのがわかる。彼の影で視界が暗く覆われたかと思うと、まぶたにそっと口づけされる。そして彼は手の動きを止め、ゆっくりと身体を離した。

ようやく開いた私のまぶたは、涙を我慢しきたためか、からからに乾いていた。真っ赤に充血しているであろう目で見上げた修は、私の情けない顔を見て、たれがちなまなじりを下げてみせる。

「おれ、舞美のこと、好きだから」

修の告白を聞いたのは、これがはじめてだった。

そして私は、それに、何も言うことができなかつた。

気づいていた。私はそれを知つていて、だからこそ修のことを利用したのだ。好きな人には他に好きな人がいるという、むくわれない気持ちの痛みは誰より私自身がよくわかつていたはずなのに。私は自分のことばかりを考えて、修の気持ちも気づいているようでは気づかないふりをしていた。

はじめて彼の言葉で聞いて、いかに自分のしたことが身勝手だつたかをあらためて思い知る。そんな自分をどうして修は好いていてくれるのか、私にはさっぱりわからなかつた。

再び涙がこみあげそうになる私に、修は返事を求めなかつた。視界が歪んでうまく見えないけど、彼のその表情は微笑んでいて、けれど翳りがあることをまなざしは隠せてはいなかつた。

「じゃあおれ、テツローのとこ行つてくるわ。送別会の話とかもちやんと聞いてくる

最後にまた、ぽんと頭に手を乗せて、修は教室をあとにした。

その後ろ姿を見送りながら、私はすんと鼻をする。こうえた涙が、涙腺を伝つて鼻に降りてくる。

結局私は、また泣いているのだった。

涙はなぜ流れるんだろう。

どうしてこんなにあふれるんだろう。

「私、ばかだ……」

呌く声は誰にも聞かれることなく、教室の静寂に吸いとられて消えていく。頭を押さえると、コートの衣擦れが響いて、なによりもついたため息が一番大きかった。

私はこんなに泣き虫じやなかつたはずなのに。

子供のころはよく泣いていた。嫌なことや痛い思いをしたりすると、すぐにわんわんと泣きわめいていた。赤ん坊のころは毎日泣いていただろうし、それは泣くことでしか自分の意思を伝えることができなかつたからだ。

それでも大きくなつて言葉を持つと、言いたいことを伝えられるようになつた。痛みや不満で流しそうになる涙をこらえることも覚えた。だから泣く回数は減つたはずだった。

映画や小説を読んで、感動して泣いたことは何度もある。嬉しいことがあって、涙を流したことだってある。涙は悲しいときにだけ流れるものではないとちゃんと知つていた。

でも、どうして、恋をするとき涙が出るんだろう。

どうして、その人のことを想つと涙が出るんだろう。どうして胸が苦しくなるんだろう。

切ない、と、言葉にすればただそれだけのことなのに。涙は勝手に流れ出る。私はこの三年間、この涙を一体何度流したことだろう。子供のころに流した涙と、今自分が流している涙は違うもの。

感情を伝えるために流す涙と、あふれ出る感情がとまらずに流れ
る涙は、違う。

今日で、この、恋の涙はもう終わりにする。次流すときがまた来
るかもしれないけれど、それはまた、別の人を想つて流したい。
だから私は、ずっと涙をこらえ続けていた。

「あれ、広崎？」

ひとりになつた教室でぼんやり時間がすぎるのを待つていねと、
ふいに扉の開くきしんだ音がした。

「先生？」

「最後に残つてるのが広崎つていうのはなんだか意外だな」
入ってきたのはテツローだった。

「野宮のこと待つてたのか？ 送別会の話はもう終わつたはずだけ
ど……お前たちはほんと最後まで仲いいんだな」

テツローは写真部の顧問だった。修も送別会の話が終わつたんだ
からもう家に帰つているはずだけど、先生もまた、私が修とまだ付
き合つてゐると思っている人の一人だった。

「たまに一人で顔出しに来いよ。お前たち後輩に人気あつたし、喜ぶぞ」

「本当は先生が来て欲しいんじゃないですか？」

「ばれたか、と歯を見せながら笑って、テツローは教壇にのぼる。何も書かれていないまつさらな黒板を見て、ほうっと息をつく横顔は、式とHRでさんざん泣いた名残か、今もまだ泣いているかのようなしおしおのままになってしまっていた。

「職員室に残つてないと、誰か会いに来るんじゃないですか？」

「ひとつおり落ち着いたからもう大丈夫なんだよ。用事があつたらきっと教室に来るだろうしな」

毎朝SHRでそうしたよう、テツローは教卓に両手をついて、誰も座つていらない机を順番に田でゆっくりとたどつていく。窓に背をあずけた私は、「コートのボタンをしつかりととめ、卒業式の余韻にひたる先生を見つめていた。

スーツの胸ポケットに、誰が入れたのかクラス一同であげた花束の白いマーガレットがさしてある。泣き虫で寂しがりやの先生にはその可愛らしい花がとても良く似合っていた。

「三年間つて、あつという間だつたな……」

感慨深げに呟くテツローは、きっと頭の中で、私たちが入学してきたからの記憶をめぐらせているに違いない。目線はどこか遠くを見ているようで、その表情は寂しそうだけど、どこか誇らしげでもあつた。

「広崎は、高校生活、どうだった？」

「どうつて、いうと……？」

「俺はまだ、広崎たちに自己紹介したのが、ついこの間のことのうに思えるんだよな。もちろんちゃんと三年間の記憶もあるんだけどさ、一日じちじちが濃くて、それを追いかけているつちにあつと

いう間に卒業式が来た気分だ

先生といったって、テツロー自身はまだ教師としての経験は浅いほうだ。生徒と本氣で喧嘩したことだってあるし、大人気ない態度をとることも多かつた。それでもちゃんと、進路に悩む子には相談に乗つてくれたし、授業よりも勉強よりも遊びたい気持ちが強い私たちの気持ちをわかりつつもしつかりと諭してくれたりした。ベテランの教師とは違う青臭さみたいなものに、きっと私たちは心を開いたのだと思う。

「私もたしかに、あつという間だったとは思いますね……」

この三年間は、ほんとうに、たくさんあった。学校の行事は楽しかったし、テストはやっぱり辛かつた。部活ではいろいろ貴重な体験ができたし、進路をどうするか決めるにやはりやっぱりそういう悩んだ。

人を好きになつたこと。それがとても辛かつたこと。苦し紛れに修と付き合つたこと。毎日がたくさんさんの気持ちに満ちていて、そのときは時間なんてまったく感じなかつたけど。いざ今日という日が来てみると、本当に風のようになつてしまつた三年間だつた。
「でも先生は、学校のこと以外にも、いろいろあつたじゃないですか？」
「子供だつて産まれたんだし」
「そう、子供もあつといつ間に大きくなつたよ。今日連れてこれたらよかつたんだけど」

テツローが毎日自慢していた愛娘の姿を、私は一度だけ見たことがあつた。三年の学校祭のときに、模擬店を見に来たのだ。遠目でほんのすこしの間だつたけれど、子供を抱き上げる先生の顔がやらでれでれした父親の顔だつたことをよく覚えている。

奥さんことを話題に出すとみるみるうちに表情が緩む愛妻家ぶりがまた面白くて、みんなことあることにからかっていた。

そんな日々も、もう、戻つてこない。
「広崎、野宮のところ行かなくていいのか？ 早くしないと先に帰るかもしけないぞ？」

「修のこと待つてたわけじゃないんで」

私の言葉に、テツローが意外そうに眉をあげる。そりゃあ、卒業式が終わってひとりで教室にいる生徒は不思議に見えるに違いない。けれど私だって、先生のよひこ、最後の日の余韻を味わいたかったのだ。

「……先生」

「なんだ？」

彼の顔をまっすぐに見て、私は呟つた。

「私、先生のことが好きです」

end

入学式の日。笑顔で自己紹介をした先生を見て、かつこじいなと思つた。

けれどすぐに生徒からの質問で、結婚したばかりだといふことを知つた。

先生に恋をするなんて嫌だったから、既婚者であることに最初はほつとしていた。

けれど、興味を持つて入部した写真部の顧問が先生であったことや、一年生のクラス替えでまた担任になつたりして。毎日顔を合わせるうちに、どうしても意識するようになつてしまつていた。

テツローの話はとても面白くて、授業もやる気が出て、部活も楽しかつた。叶わない恋だとわかっていても、彼を想うと胸が高鳴るのがとまらなくて、この想いは落ち着くまで心に秘めておこうと思つていた。

けれどテツローの子供が産まれたとき、私の中でなにかが変わりはじめて、彼の幸せを素直に喜べない自分に気がついた。

決して受け入れてもらえないとわかっているのに、彼の一一番になりたい自分がいた。

子煩惱っぷりを発揮して、毎朝撮つたばかりの写真をみんなに見せる姿や、進路の相談をする女子と話しているのを見るだけでも、思わずむつとしてしまう自分がいた。

気づけばもう、後戻りできぬいぐらい好きになつてしまつっていた。そんな嫉妬心や独占欲をなくしたくて、でも簡単に相談できる相手はまわりにいなくて。唯一心を開けたのが修だったから、私は修を利用してどうにか自分の気持ちに折り合いをつけようとして。

でも、結局、できなくて。

気持ちを抑えることができないのなら、伝えて、返事を聞いて、それであちゃんと終わりにしようと思ったのだ。
たとえ結果が見えていたとしても。

「……先生？」

私の告白に、テツローはただただ、じりりを見つめ返していくだけだった。

突然の生徒からの告白に困るのは無理もないと思つ。とくに私は、修という彼氏がいるように思っていたのだ。だからよけいに彼も、私の口からこんなこと言われるだなんて思つてもみなかつたに違いない。

広崎、と、私の名前を呼ぶこともしない。生徒から告白されたのはたぶんはじめてなんだと思う。なんと答えたらいいか言葉を探しているのか、まばたきの数がやけに多い。

私は、ただ一言、『ごめん』と言つて欲しいだけなのに。
そうしたら、終わりにできるのに。諦めがつくのに。

卒業式のこのときを選んだのは、後になつてお互に氣まずくなることを避けるためだ。クラスや部活の送別会のときに言つのがよかつたかもしれないけど、そつすると想いを伝える時間があるとは限らなかつた。

長い沈黙に耐え切れず、先に視線をそらしたのはテツローだった。

「……『ごめんな』」

搾り出すようなその声に、私はただ、うなづくしかできない。つめていた息を、細く長く吐き出す。そして、この田のためにずっと考えていた言葉を、そつと舌の上に乗せた。

「奥さんと子供が大好きで、幸せそうにしている先生が好きでした」「嘘だ。本当は、先生の一番でいられる奥さんと子供がうらやましくてねたましくてたまらなかつた。

でも、いつ言えば、先生が困ることはないと思つた。ひとりの男

性として見ていろのではなく、夫であり父であるテシローを見ていると言えば、あとで彼が悩むことも軽くなるだらうと思つた。

たとえそれがうわべだけの言葉だとわかつていても、ただの綺麗「」だとしても。私の自己満足だとしても。

憧れの恋だということにしてしまえば、

「……ありがと」

彼はそう言つことができるから。

本当の気持ちを知つてるのは、私自身と、修だけ。それでいいと思う。

いい恋しろよ、とか、もっと他にいい人がいるとか。そんなよけいな言葉はいらなかつた。ただ断つてもらえればそれでよかつた。

「……じゃあ、私、帰りますね。先生、今までありがとうございました」

最後の最後だというのに、自分でもわかるぐらうござこちない笑顔になつてしまつた。顔を見たつもりだつたけど、わかるのは胸元のマーガレットだけで、どんな表情をしているかなんてまったくわからなかつた。

決して振り向くまいと、教室を出た。彼が後を追つてくることはもちろんなかつた。

階段を降りて玄関にさしかかったところで、堰を切つたように、まぶたから熱いものがこぼれだした。

私はそれをぬぐうこともせず、ただただ頬を伝わせ、流し続けた。

たくさんのかよなりを、この涙ですべて流してしまおうと思つた。

E
N
D

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1317/>

さよならのなみだ

2010年10月14日12時12分発行